

暴力に逆らって書く文学

大江健三郎論の『奇妙な仕事』に逆行する意味

クリストファー・イシャウッド

・はじめに

本稿は大江健三郎の『奇妙な仕事』（一九五七年）を「暴力」の側面から分析している。『奇妙な仕事』の読者の目に跳びかかる暴力を主に二種類に分けることができる。一つ目は動物虐待、とりわけ一五〇匹の犬の処分が象徴する物理的な暴力である。そして二つ目は犬の処分を正当化するイデオロギー、とりわけ構造的な、または制度化された暴力である。暴力の形態には物理的なものから心理的なもの、行為主体が個人に特定可能なものから集団的なものまでさまざまに考えられる。その中で行為主体が不明確であり、その間接的・潜在的なアプローチで行なわれる暴力の形態を構造的暴力と呼ぶ。本稿の目的は大江が『奇妙な仕事』において、どのように構造的暴力とその他の暴力の因果関係を描いているかを分析することである。

『奇妙な仕事』における構造的暴力は次の三つの形態をとっている。物理的・心理的暴力を正当化するイデオロギー、暴力を利用する責任問題、そして暴力を使い続けるために人間の記憶力を操ることである。もっと具体的にいえば、『奇妙な仕事』が描いている構造的暴力は戦争を正当化する排他的ナショナリズムや人種差別と過去の事実を無視する一方的な歴史認識の無責任のことを指している。この後、それぞれの構造的暴力の形態を明らかにしたい。

本稿の主な仮説は、『奇妙な仕事』をアレゴリーとして読めば、出版の三年後の一九六〇年に行なわれる日米安全保障条約（通称：安保条約）改定に反対する大江の理由がはっきり分か

ることができる。『奇妙な仕事』に出てくる「学生運動」は明らかに米軍基地の拡張に反対した砂川闘争を指している。心理学の側面からいえば、『奇妙な仕事』を書いている最中に朝鮮戦争の記憶が高度経済成長によって段々と日本人国民の共同体の無意識に抑圧されるようになっていた。戦争中にアメリカと日本側からの朝鮮人に対する人種差別のプロパガンダを見た大江は、日米安保体制が象徴する対米従属の状況と同じ人種差別の視点から見ようとした。したがって、本稿で強調したいことは、日米安保条約の構造的暴力をアレゴリーとして書きながら大江は自らの作品において、日本の対米従属の状況に強く反対している。

さらにもう一つの強調したいことは、『奇妙な仕事』に逆行することによって、今日の日本が直面している劇的な転換期、とりわけ自民党などの保守政権の改憲に対する要求、集団的自衛権の行使、安全保障や特定秘密保護法と国家安全保障会議（日本版NSC）の誕生などの根本的な問題がより明確になることである。したがって、著者の望みは構造的暴力の側面から『奇妙な仕事』をアレゴリーとして読めば、日米安保条約体制をめぐる最近の政治的動きが少し理解しやすくなることである。

一 『奇妙な仕事』に逆行する『さよなら、私の本よ！』

では、この小論の題名で使われている「逆行する」の説明から始めよう。「逆行する」という言葉は両義的な意味を孕んでいる。つまり、「逆行する」という時に、私たちは「過去」

へというように意味定義で理解する傾向がある。しかし、大江の作品において「逆行する」というのは「過去」への動きだけではない。つまり、大江は物語の架空の世界において、「未来に逆行する」というSFのような現象を引き起こす。言い換えれば、物語において進行する読者は想像力を通じて、同時に逆行するように進む。この現象をうまくとらえているのは大江が愛読しているベンヤミンの『歴史学テーゼ』であろう。

ベンヤミンの「歴史テーゼIX」のイメージによれば、歴史の天使は「顔を過去に向けている。ぼくらであれば事件の連鎖を眺めるところに、かれはカタストロフのみを見る。そのカタストロフは、やすみなく廃墟の上に廃墟を積みかさねて、それをかれの鼻つききへつきつけてくるのだ。たぶんかれはそこに滞留して、死者たちを目覚めさせ、破壊されたものを寄せあつめて組みたてたいのだろうが、しかし楽園から吹いてくる強風がかれの翼にはらまれるばかりか、その風のいきおいがはげしいので、かれはもう翼を閉じることができない。強風は天使を、かれは背中をむけている未来のほうへ、不可抗的に運んでゆく。(『ベンヤミン「歴史学テーゼ」精読』今村仁司、岩波現代文庫、二〇〇〇年、頁六四) この文書で気になる部分は、天使が「背中を向けている未来」に進みながら「死者たちを目覚めさせ」ようとしているところである。なぜならば、大江も自らの作品において、過去に向けて死者たちを目覚めさせようとしながら未来に逆行しているからだ。ベンヤミンのテーゼによれば、歴史は「未来」からくる嵐によって飛ばされる。そして未来からくる歴史に大江は背中を向けながら、歴史の産物である「カタストロフのみを見る」。つまり、ここで強調したいことは、大江の「逆行する」行為は「過去」と「未来」の両方に当てはめることが出来る。では、『奇妙な仕事』に「逆行」しながら、この作品が未来からくる大江の作品に対してどのようなイメージを与えてくれるのであろう。

デビュー作である『奇妙な仕事』の五〇周年の記念を迎えて、二〇〇五年、九月に大江は三

部作小説の完結編として『さよなら、私の本よ!』を出版した。長い作家生活の最後の小説と宣言した大江の『さよなら、私の本よ!』は実に興味深い仕方で完結する。終章「徴候」で、奇縁で結ばれた幼馴染の著名な建築家椿繁が主人公の長江古義人にむかって、お世話になったマーちゃんのために贈り物をしたいと同時に、古義人の「書いた本の始末をしてやろう」と述べる。その贈り物とは、「真のコギーを記憶するために」繁が、五月祭特集号の東京大学新聞で賞を取った古義人の短編をコピーして、小さい本を作るという。繁はその短編の一部分を次のように引用する「《夕焼けははじめていた。犬の一匹が高く吠えた。僕らは犬を殺すつもりだったろう、とあいまいな声で僕はいった。ところが殺されるのは僕らの方だ。女子学生が肩をしかめ、声だけ笑った。僕も疲れきって笑った。犬は殺されて、ぶっ倒れ、皮を剥がれる。僕らは殺されても歩きまわる。しかし、皮が剥がれているというわけね、と女子学生はいった。全ての犬が吠えはじめた。犬の声は夕暮れた空へひしめきあいながらのぼって行った。これから二時間のあいだ、犬は吠えつづけるはずだった。》」

周知の通り、繁が引用している短編は大江のデビュー作『奇妙な仕事』の結末である。つまり、大江の最後（と宣言している）作品の終章に自身の最初の作品が出てくる、という円環構造をなしている『さよなら、私の本よ!』はあきらかに「反復」と「逆行」の絡繰りをうまく現している。こうして読者は『さよなら、私の本よ!』を媒介として結ばれている『奇妙な仕事』の「読み直し」への誘いを無視できるはずがなかろう。Retroactive Continuity「後づけ設定」とでも言われるこの方法によって、歴史は逆説的に未来によって形づけられる。特に、大江の場合、これは「偽の記憶」の正体を暴くと同時に、過去の「普遍性」に欠けている部分を付け加えるという方法である。引用を通じて過去を異化させるという方法は、たとえば蒐集家と同じように「コンテキストの域外で対象を「引用」

し、そのようにして、対象それ自体の価値や意味を内包する秩序を破壊する。」(『中味のない人間』ジョルジョ・アガンベン、岡田温司その他(訳)人文書院、二〇〇二年、頁一五六) 大江は引用によって「異化させる」方法を「ズレ」というように説明している。たとえば、大江は引用の課題について次のように述べる。「本当に、引用の問題はいままで小説——少なくとも『懐かしい年への手紙』以降の自分の小説——の課題として、私の小説作法の最大のものでした。まず引用する文章と地の文章との間になめらかさも大事ですが、なによりズレがなきゃいけない。そのズレを保ちつつ、その上で精妙なつながり方をさせていく、そういう文章を作ることが文体のつくり方での注目的にさえなりました。」(『大江健三郎、作家自身を語る』新潮社、二〇〇七年、頁一九九)

大江は『取り替え子』を書きはじめた段階で、ベンヤミンの歴史哲学を読んでいた。それは、おそらく大江の死んだ人間を生き返らせる方法において大きな影響を与えたのであろう。たとえば氏はベンヤミンの影響について次のように説明する。「僕自身のなかで、死んだ人間がどのように生きるかということが、子供の時から大きな問題です。未来のことを考えるよりも、過去のある一時点を考えて、そこで死んだ人間をもう一度生きさせるということが、僕の願いだった。(略) その点、ベンヤミンの有名な歴史哲学についてのテーゼにも似たものがあります。彼が考えているものは、過去の一時点に視点を置いて、そこに情緒的に同化しようとするのではなくて、歴史によって捨てられた方を選択する、という方法です。もう一度その捨てられたマイナスの方を組み替えて、その意味を探っていく。それが、今後の僕の小説の書き方になるだろうとも思っています。」(『大江健三郎・再発見』集英社、二〇〇一年、頁七二) 死んだ人間を生き返らせること、例えば『火山』という(『奇妙な仕事』の前にてた)「小説のテーマもそれだし、その(学生運動にかかわって自殺したお茶の水大学の) 死んだ女子学生が生き

ていれば『奇妙な仕事』に出てくるような感じだろうと、それを書こうと思った。」(同書、頁五五) つまり、後で引用するように、『奇妙な仕事』に出てくる「女子学生」が仕事の「ペイをもらったら火山を見に行くわ」というセリフは明らかに『火山』の女子学生を生き返らせる方法である。ということは、大江は「死」と「生」の隔たりを媒介するように、「引用」という「反復」の方法によって、過去をそのままではなく、現時点から後づけ設定として、死んだ人間を囲む文化や伝統を「脱文脈化」と共に新しい語を得ることができる。これは『さよなら、私の本よ!』に出てくる『奇妙な仕事』の引用の役割を解明してくれるはずだろう。

一 歴史認識のあいまい性と「メランコリア」の危険性

大江の歴史認識を象徴する引用／反復などの方法を明白にするために、氏が初期頃から抱えてきたある心理的問題に触れなければならない。大江が繰り返し過去に逆行する理由、とりわけその行動をとる動機は、「死／喪失による悲しみ」と深く関わっている。大江はたびたび自分の作家生活は想像力と記憶力が衝突した瞬間から始まったというように言い表している。上京して東京大学に入学した大江は底無しの孤独感に落ち込んだ。それは大江の愛媛県の山村での生活と東京での個人的な体験という二つの極めて異なる生活の狭間から由来するアンビバレント・セルフを反映しているかもしれない。アンビバレント・セルフという表現は大江の言葉ではないが、そのような分裂されたアイデンティティーを連想させるように、彼は「mourning」と「melancholy」という二つの異なった単語によって自分の精神的肉体的ジレンマを説明しようとするのである。

たとえば、大江はこの状態について、次のように説明している。「『取り替え子』についての批評で、心理療法家の河合隼雄さんが、これは長い時をかけて人の死を悼む、ということの一例だ、ということを書いてくださいました。ス

タイロンが自分のデプレッションのよってきたところを理解しようとつとめて、思春期の前に母親を失い、それに不完全な悼みしかできなかったことがそれをもたらした、といっていることを思います。スタイロンは“incomplete mourning”と書いています。フロイドの用語を使って、ということかも知れません。スタイロンの研究書を書いたJ・L・Wウエスト三世という研究者は、具体的にフロイドの“Mourning and Melancholia”という論文をスタイロンが読んでいたといっています。それが後年自己破壊の意志の種子になっているようだ、ともいっているのです。私も伊丹さんもそれぞれ思春期の前に父親を失った経験があり、それは二人ともに大きい影響のあった出来事です。」(『話して考える』と『書いて考える』大江健三郎、集英社、二〇〇四年、頁二一九) つまり『さよなら、私の本よ!』を通じて『奇妙な仕事』に逆行することによって、大江は「melancholy」を乗り越えて、「mourning」のプロセスの入り口を探ろうとしているのではないかと思う。

「melancholia」という病状は現実を認めない「不完全な悼み」であると同様に、(過去の)現実を認めないが故に歴史認識があいまい化されてしまう。要するに、(過去の)事実が明白ではないが故に、人間は完全に悼むことが出来ない。したがって、心理学の理論に従えば、「melancholia」を乗り越えるために、私たちはまずトラウマの事実を知らなければならない。

二 『奇妙な仕事』の読む鍵としてのブリコラージュと「Build/Unbuild」/「Learn/Unlearn」の働き

メランコリアを乗り越えるために、大江は民主主義の価値体系を効果的治療方法として自分の作品に取り入れている。たとえば、物語の内容のレベルで、社会の周縁に押し出され、沈黙させられた人たちの他者性に気付くように、大江は小説の架空の世界において、とりわけ死者たちからの伝達に読者の耳を傾けるようにしている。さらに、物語の「内容」と同時に、大江は

作品の文体の形態(フォーム)のレベルでも、読む行為自体を民主化しようとしている。要するに、民主主義的文学を書く目的として、大江は読者に自由な読み方ができるように、いくつかの絡繰りを作品中に導入する傾向がみられる。その中心は、「再読」を求めるような手掛かりを読者に与えることである。例えば、大江がいうように「一冊の本を初めて読むとき、私らは言葉のラビリンス(迷路)をさまようような読書になることがしばしばある。しかしもう一回読むときには、方向を持った探求——「探求」をノースロップ・フライは quest といっています——になる。何かあるものを探し出して、つかまえようとする、そういう行為に転じる。それが rereading、もう一度読むことのいい理由なのだ。」(『読む人間』大江健三郎、集英社、二〇〇七年、頁三九) つまり、再読によって、読者の読む行為を束縛しないで、より自由な読む体験を与える目的であろう。

では、大江の読み直しへの期待に応じるために、読者はどのようにして『奇妙な仕事』を読み直せば、何かあるものを探し出すことが出来るのだろうか。まず、最初にいえることは、大江が読者に期待しているのは作品を再読する時にその作業をブリコラージュ的に行なうということである。ブリコラージュの定義の問題を分かりやすくするために、大江が「ブリコラージュ的再読」の作業に含まれている「build/unbuild」と「learn/unlearn」という言葉に先に触れたいと思う。

大江にとって「歴史認識」と「建物」は密接な関係を成している。『さよなら、私の本よ!』を見れば、このことが分かる。つまり、「小さな老人の家」という別荘を所有している建築家椿繁が病後の静養に誘われた古義人と一緒に暮らす、という設定である。さらに、「サンディエゴの学部で建築史をやっているうちに、日本のファシズム時代の建物をめぐって日本近・現代史を専攻するネイオ」という人物も登場させられているように、『さよなら、私の本よ!』における建物は重要な意味を持っている。

さて、建物をめぐる話に一つの共通している点があることにやがて読者は気付いていく。それは「小さな老人の家」の屋根の「修理」と、雨漏りによって腐って固まっている古義人のノートや資料の処分という話である。実際に、建物の取り壊しと資料やノートの処分の「意味」を把握するために、終章「徴候」に出てくる「“build/unbuild”」という言葉に注目すべきである。「徴候」に出てくる“Build/Unbuild”の「unbuild」を「破壊する」というように訳されているが、それは英語の「destroy」ではないところが大江の作品における翻訳作業の重要な役割を反映している。すなわち、「destroy」と違って、「unbuild」は「循環」するというニュアンスがある。日本語に逆翻訳をすれば、この二つの言葉は「工作」や「修理」するという意味もある。大江は自らの作品における構造主義によって、この「工作／修理＝build/unbuild」の作業を繰り返し行ううちに、何か新しい視点を想像力によって発揮することができる。こうして大江が期待しているのは、過去にある壊れかけている物／者を修理して、未来に新しい物／者を再生産するという作業である。この作業は大江の「ブリコラージュの再読」の概念に含まれている一つの方法で、大江の作品全体の読み方を反映している。

大江は『定義集』における「Build/Unbuild」と同じような「対」の働きを持つもう一つの方法として、「Learn/Unlearn」という対象語に触れている。大江は一方で日本の「ファシスト時代」を脱構築するために建築を比喩的に使いながら、他方で歴史教科書によってあいまい化されている日本の歴史認識を明白にするために、誤った歴史認識を「unlearn」するという、正しくない認識を正しい認識に変えることを目論んでいる。大江はこの二つの言葉(learn/unlearn)の間の緊張感についてこのように説明している。「私は、ずっと影響を受けてきた文化人類学の研究方法への、新しい批判者ジェームズ・クリフォードの本で、この言葉に出会ったことを思い出しました。三部作の終わ

りの巻で、主人公に向けて、アメリカの西海岸で長い間働いた大学を退職して日本に帰り、別の仕事をしようとしている老人が、おれは半生に渡った教育をやるうち、いつの間にか、アカデミズムでの自分のクローン人間だけ養成していたんだ、という転職のきっかけをはなします。そこで、やり直しを始めた、それは学んできたものを忘れる、unlearnすることからだ。するとそれにこたえて、おれに学んだことが正しくなかったこと教えてくれる、unteachしてくれる若い連中が出てきた……」(頁四七)すなわち、『さよなら、私の本よ!』を通じて『奇妙な仕事』に戻ることによって、大江は読者を「unteach」と同時に、読者はあいまい化された誤った歴史認識を「unlearn」することができる、というように解釈が出来る。

大江が上に引用しているジェームズ・クリフォードは自分の研究においてブリコラージュが重要な役割を果たしているというように指摘している。『文化の窮状—二〇世紀の民族誌、文学、芸術』(訳、二〇〇三年)においてクリフォードは現在の文化人類学における「本質主義」の問題を文学と芸術のベクトルを通じて分析しながら新しい弁証法的民俗学を提供している。それは、特に前までに明白と思われた「自己／他者」「うち・家／外・海外」や「野蛮／文明」という二項対立を詳細に分析し、詩学的政治的側面から新しい方法を描いている。『文化の窮状—二〇世紀の民族誌、文学、芸術』、とりわけ第七章「新語のポリティックスク・エメ・セゼール」第十一章「オリエンタリズムについて」におけるクリフォードの理論は西欧が土着民に押しつけた一方的歴史認識と記憶からの「脱植民地」への可能性を弁証法的想像力に見出している。クリフォードが直面している文化人類学における植民地主義の問題に反響するように、大江は日本の大文字の「National History=政府が権力をもって指定する歴史認識」に対して、小文字の「local history=政府の支配圏外に認められていない地方または個人の歴史認識」を作品中に導入している。

ところが、大江はクリフォードが利用しているブリコラージュの方法を明白にするために、鶴見俊輔の定義を選択し、unlearnの働きについて次のように説明している。「《大学で学ぶ知識はむしろ必要だ。しかし覚えただけでは役に立たない。それをまなびほぐしたものが血となり骨となる。》」（『定義集』頁四七）Unlearnに「対」の言葉としてとりあげられているunlearnとは、「（正しいとされていることを）正しくないと教える」というように大江が説明している。日本近代の歴史認識という問題の側面から考えると、なぜ大江はこのような単語に興味を示したか読者はわかるはずであろう。日本の「新しい歴史教科書を作る会」にまつわる歴史認識の問題、高等学校から大学までの歴史教育のタブー化されているトピックス、戦争責任、天皇制、日米関係などは大江の初期頃から作品における中心的な問題として位置づけられてきた明らかな理由がわかるはずであろう。なるほど、壊れかけている建物を修理「unbuild」というアナロジーを通じて、古義人は自分の腐って固まったノート／資料を「unlearn」というブリコラージュの作業を、大江は自分の作品を読む鍵として読者にアピールしている。遡って行われる「再読」という読む方法、それは「通時的な歴史感覚とは別のものに向けて目を開いてくれる力の影響がある」ブリコラージュの方法だと大江は強調している。敢えていえば、大江が『さよなら、私の本よ！』を通じて読者にアピールしていることは、自分の作品をブリコラージュ的な読み方にそって「再読」ということである。古義人が腐って固まった資料／ノートの処分、「小さな老人の家」の修理、歴史感覚などというテーマがほぼ同時に登場する第7章「犬と狼の間」を分析すれば、ブリコラージュな読み方としての『奇妙な仕事』の再読がどのような解釈＝トランスレーションを可能にするか、分析してみよう。

三 家畜／文明と「スピッツ／セパード」の間

実際に、大江は二〇〇九年一〇月三〇日になくなった社会人類学者・思想家であるレヴィ＝ストロースの死を告げる記事を読んで、「未来をつくるブリコラージュ」という小エッセイを書いて、自らのブリコラージュに対する感心について述べている。この小エッセイを書くために、大江は過去に読んだレヴィ＝ストロースの『野生の思考』を取り出して、自らの作品における両義性をもつ時間帯系を書き込むためにとったノートを再読した。いうまでもないが、『さよなら、私の本よ！』に古義人は自分の資料やノートを処分する時に『奇妙な仕事』がでてくる出てくることを注目すべきである。大江が指摘するように、仏和辞典で見る「ブリコラージュ」の定義は、「1、（家庭内などの）修繕、工作。2、応急修理。そして3は、レヴィ＝ストロースによる用語とことわって、器用仕事、一貫した計画によらず、有り合わせの素材、道具を適当に組み合わせて、問題を解決してゆく仕方、とあります。」（『定義集』大江健三郎、朝日新聞出版、二〇一二年、頁一八四）

大江は戦前から実家にあつた「蓄音機や扇風機が次々に故障するのを修理にかかり」という記憶を懐かしむように語り、レヴィ＝ストロースの『野生の思考』におけるブリコラージュがもつ「神話的時間」の構造について、次のような部分を引用する。「土器、織布、農耕、動物の家畜化という、文明を作る重要な諸技術を人類がものにしたのは、新石器時代だが、そのような「具体の科学の成果は」精密化学、自然科学のやがてもたらす成果とは異なっている。しかし一万年も前に確立されたそれは、いまわれわれの文明の基層をなしている。原始的科学というより「第一」科学と名づけたいこの種の知識が思考の面でどのようなものであったかを、工作の面でかなりよく理解させてくれる活動形態が、現在のわれわれにもこのこっている。つまり器用仕事（ブリコラージュ）。それをつうじて、

科学的思考とはまた別の、神話的思考を、いわば一種の知的な器用仕事を、確かめることことができる。」(『定義集』頁一八六)

『定義集』において、大江が引用している「動物の家畜化という、文明を作る重要な諸技術を人類がものにした」という、レヴィ＝ストロースのブリコラージュの定義を思い出せば、『奇妙な仕事』における「家畜」のテーマがはっきり現れてくる。『奇妙な仕事』は三人の学生が三日間にかけて一五〇匹の野良犬を処分するという、非常に「奇妙な」設定になっている。その犬たちは東京大学の付属病院の裏に隠れているコンクリート塀の中に一匹ずつ杭に繋がれている。国有の「付属病院で飼っていた一五〇匹の犬を英国人の女性が残酷だということで新聞に投書し」犬を飼い続ける予算も病院にないので、犬を一度に殺してしまうところから始まる。

語り手の《僕》が提示版でアルバイトの募集の広告を見てから病院の受付に情報を問い合わせるが、「そのアルバイト募集についてはまったく関係していない」と受付の人はさりげなく答える。病院の守衛にしつこく訊ねてから、《僕》は病院の裏へ行けと言われる。そこで待っているのは同じアルバイトを引き受けている私大生、女子学生、犬殺しと犬の死体の処分を担当している「無名の男」である。病院から引き受けた仕事を担当している「無名の男」によると、三日間で一五〇匹の犬を殺すということである。

《僕》の仕事は犬を一匹ずつ犬殺しに連れて行って、そして犬殺しは犬を一匹ずつ棒を振って殴り殺し、犬の毛皮を脱皮する。私大生は犬の死体を管理人に持って行って、女子学生が犬の毛皮から血を洗い流してから積み重ねる。杭に繋がれている「大型の犬や小型の愛玩用の犬、それにたいはいは中型の赤犬」、殆ど全てのけちな雑種で痩せている犬は「どこかで似かよっている。」それは「敵意をすっかりなくしている」というところかもしれない、と《僕》は思う。大江はまるで人間と動物の違いを見分けられないように日本人の学生たちと野良犬たちの

共通点について次のように述べる「僕らだってそういうことになるかもしれないぞ。すっかり敵意をなくして無気力につながれている、互いに似かよって、個性をなくした、あいまいな僕ら、僕ら日本の学生。」

《僕》は犬たちと日本の学生たちが「似かよっている」ところを直接政治の問題に繋げている。「しかし僕はあまり政治的な興味を持つてはなかった」ために、犬／学生のハイブリッドが持つ意味を解釈できない。むろん、《僕》がいう「政治的な興味」というのは、砂川の米基地に対する学生のデモのことである。一九五七年、五月、二十二日の東京大学新聞に掲載した大江の「受賞の言葉」をみれば、その「犬／学生」のハイブリッドというイメージが浮かんでくるかもしれない。大江がいう「砂川には明日の文化を作るエネルギーがあると大男がいった。寒さに震える躰、歌いすぎて疲れた頭とひりひりする皮膚。それらは明日の文化を作らない。砂川が明日に結びつくとしても、あれらは決して明日とつながらない。屈辱的な仕事がある。明日の文化がおそらくはあるだろう。しかし屈辱的な仕事はいつまでも美しくはならない。僕や僕の仲間たちは屈辱的だと知りながら雨の中で胸を組んだのだ。」砂川闘争は大江が『奇妙な仕事』を書いている最中に大きく局面転換をした。一九五六年一〇月に、強制測量反対のため六〇〇〇から七〇〇〇人の労働者、学生などが機動隊と激突し、一応測量を阻止した。そして翌年、一九五七年七月(『奇妙な仕事』が出た二ヶ月後)の闘争で基地内に入ったとして、日米安保条約に基づく刑事特別法2条違反、暴力行為処罰に関する法律の適用により、九月二二日に、労働者、学生二三名が逮捕されるようになった。この砂川裁判(通称:伊達判決)によって、砂川基地、従ってすべての米基地は違憲だという判決が下された。しかし、アメリカ政府(正確に言えばアメリカの駐日大使ダグラス・マッカーサー二世から)の抑圧を元に、日米安保条約は違憲だという違憲判断がくつがえされて、日米安保条約の問題に触れない留保事項と

いう決定的な判決が下された。したがって、日米安保条約が違憲だといえないことにより翌年の一九六〇年に岸信介の安保条約改定が加速した。

こうして若い大江は『奇妙な仕事』の政治的背景として砂川闘争に参加した学生運動という「明日の文化に繋ぐべき仕事」に対する「屈辱感」を運動そのものというよりも、運動の形態や学生たちの態度などに感じたことである。大江にとって、学生たちの運動は「美しかったと評価する人たち、君たちが優しいが正確ではない」。なぜならば、全学連が指令したストライキに関する「ピラの文書の非合理と不正確な事実の伝え方（中略）また、一部の学生たちの討論の仕方の煽動的な無責任さに」大江は「承服できない」からである。その屈辱は「時々、僕らの心の中で勢をもって回復し、犬たちの声とも揃みあう。」（同書、東京大学新聞）では、大江にとって日本の学生たちの問題はいったいどこから由来しているか。

上に引用した《僕》の「政治に興味がない」発言のすぐ後に奇妙で非合理的な犬が登場する。それは「スピッツとセパードの混血としか思えない不思議な犬」である。その犬はシェパードの頭をし、白い毛をふさふささせているスピッツの躰をしている。これは大江がいうブリコラージュによるものか。確かに神話的な雰囲気とするミノタウロス（人身牛頭）のような怪物である。では、なぜ大江はこのような怪物を作品に描いているか。このスピッツとシェパードの混血犬に企んでいる意味を解決するために、読者は『さよなら、私の本よ！』やレヴィ＝ストロースの『野生の思考』を参考にすれば、この謎を解読できるかもしれない。

『奇妙な仕事』がでた時点で、レヴィ＝ストロースの『野生の思考』はまだ出版されていなかった。それにも拘らず、大江が上に引用した「動物の家畜化という、文明を作る重要な諸技術を人類がものにした」という部分は気になる。なぜならば『さよなら、私の本よ！』の第七章「犬と狼の間」のテーマはピエール・ガスカー

ルの『けものたち・死者のとき』における動物の家畜と人間が開いた文明の関係について書かれているからだ。さらにいえば、「犬と狼の間」に出てくる武の「処女作から二年ほど長江さんの小説は良かった」という発言はまさに『奇妙な仕事』を指している。

二〇〇一年に出版した『大江健三郎・再発見』において、大江はピエール・ガスカールの影響について明らかにしている。さらに二〇〇七年（ちょうど『奇妙な仕事』の五〇周年）の『大江健三郎・作家自身を語る』に氏はその影響について次のように語る。「大学三年から四年にかけての春休みに、ピエール・ガスカールの『けものたち・死者の時』の原書と、渡辺一夫さんの翻訳を合わせて読み、小説を書いてみようと思いついて、すぐに三十枚ほど書けたので、五月祭賞に応募したんです。いま読んでみると、もうガスカールそのもので、よくこんなものを自分のオリジナルな小説と自信を持っていたと不思議に思うほどですが。」（頁四九）当時、友人が自殺未遂で入院していて、その友人に「どういうふうだい？」と大江が聞くと、「毎日午後六時になると、東大病院が飼っている実験用の犬が鳴き始めるんだよ」と答えた。その友達が生き残って、病院で犬の声を聞いているという実生活上の出来事と、『けものたち・死者の時』を読んだのが偶然、同じ時期だった。（同書、頁四九）上に述べられているシナリオが『奇妙な仕事』の設定になっていることは、これで明らかであろう。それは、砂川基地の反対運動という政治的な側面とガスカールの犬と狼の物語が交差している設定である。問題は『けものたち・死者の時』はどのように『奇妙な仕事』と関わっているかを、もう少しみる必要がある。

大江は『さよなら、私の本よ！』にガスカールの『けものたち・死者の時』を直接に取り入れている。その部分は『Entre Chiens et Loups』という、つまり森のなかで犬と狼の見分けがつかない時、渡辺一夫訳でいう『彼誰時』の部分である。『Entre Chiens et Loups』の設定としては、「ドイツ国境近くの森のなかに、

軍用犬の訓練所がある。百三十頭の犬を訓練している。夜明け近くとか、変わった人物が近づくとかする時、かれらがいっせいに吠え立てる。」その光景は不思議で、奇妙である。軍用犬の訓練役を果たしている男（フランツ）の国籍はポーランド人だが、彼は国を無くして、今ロシアのパスポートの持ち主である。仕事といえば、フランツは犬に咬まれる人形役（マヌカン）として、軍部の隊長や来客のためにスペクタクル・ショーを演技するのである。おそらく大江にとって『彼誰時』におけるもっとも重要な部分は『さよなら、私の本よ！』に引用しているのと同じであろう。

その部分をここで引用しよう。なぜこのような仕事をやっているか、というパリから来た客に聞かれたマヌカンの男は次のように答える。「《あなたは僕を、気遣いか傲慢な男だと思われるでしょう。構いません。こういうわけなんです。僕がここに残っているのは、自分の果たしている情けない任務のおかげで、毎日、いえ、殆ど毎時間、「戦争の啓示めいたもの」を受けるからなのです。（中略）戦争でものは、一つの血腥くて、結局のところ、いい加減な言葉でしかありませんが、その背景にあるものは、我々の時代の陰險な恐怖、名づけようもない格闘、名もない苦悩、日々の抑圧ですし、そして、もう殆ど世界中に拡まっている、「敵対関係」なんです。》男はこう考えているものだから、《僕は僕なりに、人間としての良心の任務を果そうとしているだけなんです》といえるわけ。」ところが、軍用犬のショーが始まると、マヌカンの男は咬まれる役を捨てて、登った木から石を投げたり、棒で犬を叩いたり、必死に抵抗する方向に転換する。抵抗しているマヌカンの男、「《その様子は、打ち拉がれた男というよりも、あまりにも偉大であまりにも逞しい原始人が、人類最初の使命を重く担って、いや果てぬ森林を横切り、世界を訪れる最初の朝が待っている森端れに向かって進んでいく様を思わせた。》」

こうして狼と犬の見分けがつかないイメージ

から始まるガスカールの動物物語は直接に人間／戦争／動物という三種構造において書かれている。『さよなら、私の本よ！』が出版された二〇〇五年の翌年に大江は『「伝える言葉」プラス』というエッセイ集を出して、そのなかに「犬とオオカミの間」について次のようなコメントを下している。「世界中に「敵対関係」が広まっている。この勢いでは、暴力が人類に終末をもたらすことになるかもしれない。それでも人間が抵抗したというしるしは見せたい。犬がオオカミに戻って暴力そのものになる時代に、人間はそれに打ち勝ちうると示したい。（省略）entre chiens et loupsの成句は、森の薄暗がりに見えるのが犬かオオカミかわからない、というところから来ているでしょう。しかし小説は、犬がオオカミに戻る時、人間も文化の積み重ねなどはむなしく、逆行してオオカミにひとしくなる、それが戦争の時代の真実だと語っているのです。」（『「伝える言葉」プラス』大江健三郎、朝日新聞社、二〇〇六年、頁四四）

ところが、大江がここで指摘している「戦争」というのはイラク戦争であり、「犬がオオカミ」に逆行するのはアメリカに属している日本である。大江が『奇妙な仕事』に「逆行」して、ガスカールの「犬／オオカミ」と戦争を改めて読者の想像力に喚起させる理由は上述した引用で、少しずつ明白になってくるはずであろう。さらにいえば、『さよなら、私の本よ！』における『奇妙な仕事』への「反復」の意味も明らかに歴史認識の問題に関連する。こうして『奇妙な仕事』と『さよなら、私の本よ！』を繋げているテーマは戦争であり、戦争を象徴する犬から狼へと衰退する人間の暴力と家畜のプロセスとこれに対する歴史認識の問題に関わっていることである。

人間が初めて「家畜化」した動物はおそらく狼であろう。その始まりは約一万五千年も前であるが、狩猟採集民の周辺に狼がよって来て、まさに「残飯」を食べる習慣を身につけた。好奇心の強い狼や敵意がもっとも少なかった狼が子狼の成長のために狩猟採集民に付き添って、逆にキャンプファイアに近づいてくる敵を追い

払う役割を果たすようになったと言われている。そのうちに狩猟採集民は狼／犬が持っている価値観に目覚めて、狩猟、山羊や羊飼、橇などをひく番犬のために家畜化された。品種改良というある目的にそった品種を、系統分離や純系分離によって選び出し、現在でいう「血統書付き」の犬種の殆どは約百から二百年前に作られた。

では、「スピッツ／シェパード」の場合はどう。シェパード（ジャーマン・シェパード＝ドイツの牧犬）の名前は「羊飼」に由来しているように、この犬種がドイツで牧場犬として品種改良された。日本ではシェパードといえ一九五六年にアメリカ製テレビドラマ放送開始にともなう「名犬リンチンチン」という第一次世界大戦で有名になった犬が日本国内で話題をよんだが、ジャパンケンネルクラブ（JKC）の記録によれば、「軍用犬としてのジャーマンシェパードドッグの買い上げが盛んになるのは一九五一年からである。（『JKC50年史』遮断法人ジャパンケンネルクラブ、二〇〇〇年、頁一三五）一九五一年といえ一年前に勃発した朝鮮戦争の最中にあり、「軍需景気も手伝って日本経済は復活の兆しを見せはじめるが、一般の愛犬家が好みの犬種を手にするようになるのはまだ数年の期間が必要だった。」（同書）したがって、『奇妙な仕事』におけるシェパードとスピッツの混血犬は品種改良によって作られた犬に間違いない。つまり、この「奇妙な」犬は軍用犬（シェパード）と愛玩用（スピッツ）の混血犬である。

では、一般の人たちは血統書付きの犬の品種を購入する経済力がなければ、なぜ『奇妙な仕事』のように大量の雑種の野良犬が東京にいただろう。そしてなぜ「シェパード／スピッツ」なのか。一つ考えられるのは、米兵と日本女性の性関係に関連している。敗戦後日本の厳しい生活を象徴しているように、街中や米軍基地周辺で働いていた在日米軍将兵を相手にする私娼である「オンリー」の女性は、米兵から普段手に入らない贅沢な物を手に入れた。吉見俊哉は

ジョン・ダワーの『敗北を抱きしめて』を引用しながら、占領軍が呼んだ（組織された売春婦）いわゆる日本政府のRAA（特殊慰安施設協会）によって作られた「国のために奉仕」をさせられていた女性たちは慰安所から放り出され、しばしば街娼となっていた」と説明している。（吉見俊哉『親米反米』岩波新集、二〇〇九年、頁一〇四―一一四）つまり愛玩用のような扱いをされた女性たちは売春の全面禁止によって路に放り出され、「パンパン／街娼」になった。RAAの施設が禁止になっても、街娼たちは米兵を相手にしたが、朝鮮戦争が勃発した時、日本の米軍基地が空っぽになるという事態が発生することになった。したがって、米兵を相手にする愛玩用の犬のような扱いをされた女性たちは「野良犬」のようにパンパンになった。『奇妙な仕事』におけるスピッツ／パンパンは、朝鮮戦争から愛人が生きて帰ってこなかったが故にお金（餌？）がなくなって、捨てられるようになった。こうして『奇妙な仕事』におけるスピッツとシェパードの混血犬は在日米軍将兵とパンパンの間に作られた、いわゆる「合の子」を連想させることは明らかであろう。こうして「合の子」のことを犬に喩えて言う大江は戦後日本における「混血児」に対する人種差別の問題を指しているのではないかと思う。

むろん、人種差別を受けているのは混血児に限ったわけではない。『奇妙な仕事』における人種差別の問題にかかわるもう一カ所がある。つまり処分した犬の肉を「肉屋」に売り込んだ肉ブローカーは犬の肉を食べる習慣がある韓国人のことを指しているのではないか。とりあえずここでいえることは、こうしてシェパードとスピッツの混血犬というアナロジーを通じて大江は朝鮮戦争の記憶を喚起して、人種差別を受けた「混血児」や在日朝鮮人の問題を取りあげている。むろん、大江が描いている日本における人種差別のイメージの背景に置かれているのは強大のアメリカ像である。この設定を支えている土台として大江はファシズムのイメージを読者の想像力によって喚起させようとしてい

る。

四 ファシズムにおける人間／動物の狭間と「残酷」の両義性

大江はスピッツとシェパードの混血を通じて戦後日本、特に朝鮮戦争の時点を読者の想像力に思い出させる。その混血の犬たちの奇妙なイメージによって大江は、とりわけ人種差別と性暴力の問題を初めて自分の作品に導入している。『奇妙な仕事』に描かれている付属病院の「裏」にあるコンクリート塀に囲まれている犬たちの残酷な処分のイメージは確かに「奇妙」である。犬を殺すのに毒を使う習慣がある、という犬殺しの発言に対して、犬を飢えさせる立場をとる私大生、人間の死体焼却場の大きい煙突から上がっていく人間か犬かという不明な煙、皮を剥がれた犬や裸にさせられた学生などというイメージはいったい何を指しているのであろう。この問いに答えるために大江が当時のエッセイ集に描いた戦後日本のイメージは役に立つかもしれない。そのエッセイの一部を引用しよう。「日本の若い人間たちが、あいまいで執拗な壁にとじこめられてしまっているというイメージ、ぼくらのあいだには真に人間的な連帯はなく、ざらざらした毛皮をおしつけあってほえる犬たちのように、ただ体をからませあっているだけだというイメージ。そして、あいまいに閉ざされているために、しだいにリアリスティックな判断力や分析力が衰退したあげく、持続的なエネルギーもうしなまって怒りっぽく非論理的になった若い精神の行きつくところは、おおかれ少なかれファシズムにつながるという論理。」「徒弟修行中の作家」『厳密な綱渡り』文藝春秋、一九七二年（第二七刷）なるほど、大江が『奇妙な仕事』で描いているコンクリートの「あいまいで執拗な壁」のイメージは、多かれ少なかれナチスの強制収容所のイメージとグロテスクなほどにオーバーラップしているようにみえる。このように『奇妙な仕事』を読めば、どのような問題定義が出来るか考えてみたいと思う。

もし《僕》がいうように、「殺されるのは僕

らの方」で、皮が剥がれて「殺されても歩きまわる」ということであれば、犬を殺す側から殺される側に変容する理由はどこにあるか。すなわち、この仕事に加担することによって、なぜ学生たちが逆に被害者になるか。考えられるのは二つのことである。一つはナチスの強制収容所に生き残るために囚人はSSのガードに雇われた「カポ」（労働監視員／収容所監視員などと訳される）になったということである。囚人が囚人を監視することによって、SSは経済的に節約が出来て、直接に囚人たちと接触する必要が少なくなった。絶対的な権力者がより弱い者に「ある程度の」権力を与えて、その権力を媒介しながらいちばん下にいる人間を管理するメカニズムである。

『ドイツ人：文明化と暴力』の第四章「文明化の挫折」において社会学者ノルベルト・エリアスはナチスの強制収容所で働いていたSSと囚人の力関係を説明することに当たって「Radfahrer」（ドイツ語で「自転車に乗る人」）というメタファーを生かしている。「Radfahrer」というのは、自転車に乗る人の背中が曲がって、体の下にあるペダルを踏みつけにする、言い換えれば「部下には威張り上役にはへつらう」という意味をさしている。エリアスはこの現象を次の通りに説明する。「こういう葛藤の人間の内部における様子が顕わになる形は、このほかにも多くの形がある。「服従の快感」を別の方向で補うかのように「攻撃の快感」が見られるのも珍しいことではない。優勢な権力者との関係で意識されず表現されることもない敵意が社会的に劣位にあるか弱い人々あるいは当人がそうおもっている人々に対する憎悪やルサンチマンとなって現れるのである。上司に対しては平身低頭し、部下は踏みつけるにする「部下には威張り上役にはへつらう男」のうちに、こういう独特の屈折が確かな形で現れている。」（『ドイツ人：文明化と暴力』ノルベルト・エリアス、（訳）青木隆嘉、一九九六年、法政大学出版局、頁四四八）エリアスが分析するように、多くのSSは長く貧困に苦しめられ

た農民で、上からの社会的重圧のもとに生きながら、ナショナリズムの信念体系の形をとって自分自身の理想によって支配者と同化した結果、「自分が現実に支配者に屈服した忿懣を適当に吐き出せないだけに、社会的に弱く低級と思われる人々にその吐け口を求めた者たちの、憎悪の格好の対象とされたのがユダヤ人にほかならなかったのである。」(同書、頁四四八)。戦時中に軍国主義的教育を受けた『奇妙な仕事』に登場する学生たちは、確かに「お上」に頭を下げるように教わったわけであろう。

こうした被害者が自身より弱い被害者を暴力的に管理する方法によって、カポは死に至るような労働から逸脱することができて、薬など普通の囚人がもらえない特別な扱いを受けた。「カポ」は栄養失調や労働に適さないほど病気で弱った、まさに生と死の狭間で浮いている、いわゆるムーゼルマン(回教徒)を管理した囚人なのである。人間性の境界線にさまよう「カポ」とその境界線をこえた処理される動物の扱いを受けた「ムーゼルマン」の関係を「強制収容所における餓死や強制労働」がもたらす人間のもっとも「卑怯さ」として考えられる。こうして犬(ムーゼルマン)を管理しているのは、犬たちを裏切った学生(カポ)という設定として読めるかもしれない。恐らく大江が『奇妙な仕事』を通じて描こうとしている戦後日本の若者たちのファシズムの精神状態はこうした弱い者がより弱い者を暴力的に管理するという状態であろう。

『奇妙な仕事』に「カポ」と「ムーゼルマン」のような関係を想起させるもう一つの場面がある。まず女子学生は脚気のための新薬を飲んでいるところをみてみよう。「ほら、と女子学生は屈みこんで浮腫んだふくらはぎを指の腹で押しみせた。青黒い窪みができ、それはゆっくり回復したが、もとどおりにはならなかった。」彼女は栄養失調によって脚気にかかっているにもかかわらず、仕事を続ける。しかし、もしカポが栄養失調などで弱くなったら、彼らはムーゼルマンの枠にまた入れられることもあった。

つまり、女子学生は疲労や栄養失調によって、犬たちの枠に入れられると考えられる。ムーゼルマンの枠に入れられないように、彼女は仕事を続けなければならない。

五 犬殺しの「残酷」、私大生の「卑怯」

では、なぜ大江は『奇妙な仕事』における強制収容所と「カポ/ムーゼルマン」のような描写を描いているのであろう。それは単に戦後日本におけるファシズムのイメージを描きたかったわけにとどまるか。それとも、それ以上に理由があるだろうか。大江は確かにナチスドイツの人種差別による大虐殺の問題を相対化するために「残酷」や「卑怯」という言葉がもつ「両義性」に触れている。

この問題を詳しく展開していくために、まずは犬を殺す側というテーゼから、犬のように殺される側のアンチテーゼへの弁証法的変容、とりわけ動物になる人間というシフトをもう少しみる必要がある。『奇妙な仕事』における餓死とムーゼルマンのイメージをはっきり喚起させているのは犬たちである。犬の餌を買う予算は病院になく、飼育係が他の仕事に移ったと事務員が言ったら、「飢えさせておくのか、と苛立って犬殺しがいった。」病院の事務員は「病院の残飯をやっていたんで、飼育係ささいたらね、飢えさせるということにもならないだろうけど」ということに対して、私大生は次のようにいう。「明後日までには全部殺してしまうだろう？それに餌をやって手なずけるなんて卑怯で恥しらずだ。」私大生に対して「今日はせいぜい五十匹しか殺さないんだ、と犬殺しが怒りを押さえた声でいった。後の百匹を飢えさせておくのか。そんな残酷なことはできないよ。残酷な、と私大生は驚いていった。残酷などなんて。」こうして犬殺しと私大生の間に交わせる会話は「残酷」と「卑怯」という言葉が持つ両義性をはっきりと現している。では、読者はどのようにしてこの「残酷」の問題を考えればいいのか。犬殺しの立場と私大生の立場は、どのようにして上述したナチスドイツの強制収容所におけ

るユダヤ人の大虐殺と関係を持つのか。まずそれぞれの「殺し方」をみればその関係が少し明白になるかもしれない。

犬殺しの「殺し方」は棒を使って、一発に犬を殺すという方法である。彼は「毒」を使う習慣に強く反対しながら自分の犬殺しの文化を大事にしている。それに対して私大生は犬を飢えさせることを考えている。すなわち、私大生が犬殺しの計画に反発して、いずれにせよ犬が死ぬから餌をやることを考えるとやりきれないという。犬を飢えさせて（ムーゼルマン状態にさせて）から殺すという方法は犬殺しにとって「残酷」である。これに対して、私大生は餌をやることによって、死ぬ犬に希望を与える（または騙す）のは「卑怯」だといっている。

犬殺しの殺し方は犬と人間の力関係を保つような方法といってもいいかもしれない。たとえば、女子学生は犬殺しの方法について次のようにいう。「あの男にはね（省略）伝統意識のようなものがあるわ。棒で殺すことに誇りを持っているのね。それが生活の意味なのよ。」つまり、犬殺しは犬を、それは「卑怯」であっても犬らしく殺す方法を選ぶ。犬殺しは犬が可愛いという、極めて逆説的なことをいうにもかかわらず、犬を殺す必要があれば、それは素早く殺せばいいと考えている。しかし、これに対して私大生は次のように反発する。「僕は君のやり方は卑怯だといっているんだ。君のやり方は厭らしい。犬だってもっと上品なあつかわれ方をされていいんだ。」という。

忘れてはならないことだが、この設定はナチスの強制収容所を連想させている場所である。ユダヤ人を強制的に働かせて仕事が出来なくなると彼らをムーゼルマンのような状態まで飢えさせるか、「毒」のガスを使って殺すという方法は明白に『奇妙な仕事』に描かれている。結局、どちらが「残酷」だと決めるのは、連合国によって行なわれたニュルンベルク裁判であった。『奇妙な仕事』における連合国のような存在をなしているのは英国人の女であろう。「英国人の女が残酷だということ」で新聞に投書したが故に、

犬を処分することになった。したがって、私大生と犬殺しの「残酷」や「卑怯」などの発言の両義性を考えるために、英国人の女、すなわち連合国の立場をも視野に入れる必要がある。

六 英国人女の「残酷」発言

上にも言及しているように、私大生と犬殺しの「残酷」や「卑怯」という発言に対して、英国人の女の「残酷」発言は権力側に位置づける必要がある。そもそも『奇妙な仕事』における犬たちの処分は「英国人の女が残酷だということ」で新聞に投書し、スキャンダルを避けるために付属病院の官僚たちは早速その「恥」の対象を排除することによって始まっている。

ここで注目すべきことは、英国人の女は「匿名の投書」で病院側のことを残酷だと批判しているところであろう。敢えていえば、この英国人の女の投書がなければ、犬を処分する必要はなかったかもしれない。したがって、彼女に大きな責任感があるというように見るべきである。匿名と無責任の問題については後ほど解釈したいと思うが、その前になぜ大江は『奇妙な仕事』において日本を占領しているアメリカ人ではなく、英国人の女にしたかという質問について考えたい。

大江は「英国人の女」とナチスの強制収容所を連想させるような設定を選んだ理由について次のように考えられる。ニュルンベルク裁判でナチスドイツのSSを裁いた連合国は「残酷」という言葉に基づく「人道に対する罪」を理由に、被告者に死刑宣告を下した。この問題は東京裁判の判決によって死刑に処せられたA級戦犯にも当てはまる。つまり犬の処分に対する責任問題を考えると同時に、読者は必然的に「人道に対する罪」したがって、戦争責任について考えさせられる。

大江は実際に『犬の生死と文壇と』（一九五七年）というエッセイの中に、新聞に投書した英国人の女のことを連想させるようなコメントを書いている。大江がある座談会に出て、「ある科学的な事業に労役として使われた犬について

意見をのべた。あるいは、その犬に対する日本の民衆の反応について意見をのべた。」(『厳密な綱渡り』文藝春秋、一九六五年、頁四一) このコメントは明確ではないが、大江が発言したのはおそらく旧ソ連の宇宙探査計画の実験によって宇宙に旅立った野良犬(ライカ)のことを指していると思われる。大江は自分の発言に反発した複数の手紙を匿名の人たちからもらい、その手紙について次のように述べている。「これらの手紙がすべて倫理的な情熱で書かれていること。論理が複雑になり始めると、たちまち感情的な悪罵へ逃げこむこと。例外なくすべて初歩的な分析力に欠けていること。自分の背後に社会道徳とでもいうべき権威を想定しており、それに自分を解消させていること。」(同書、頁四二)『奇妙な仕事』における英国人の女の投書に書かれている「残酷」という発言と大江のエッセイに書かれているこのコメントを合わせて考えれば、次のような解釈ができるかもしれない。つまり、『奇妙な仕事』における英国人の女の立場を支えているのは、普遍性がある「社会道徳」、とりわけ戦争で勝利した連合国を象徴している「英国人」という権力の権威であるが、これを相対化しているのは犬殺しや私大生の「残酷」や「卑怯」という発言である。では、読者は『奇妙な仕事』における「残酷」という言葉の両義性をどのように捉えればいいのか、もう少し分析する必要がある。

『奇妙な仕事』が出た一年後、大江は「徒弟修業中の作家」というエッセイの冒頭に次のようなコメントを書いた。「一昨年の冬、ぼくはエジプトの土の家に泥まみれになって眠り、ナセルの軍隊に加わって戦いたいという、狂気じみて暗く、激しい情念にとらえられていたものだった。」(『厳密な綱渡り』大江健三郎、文藝春秋、一九六五年、頁四〇)大江は当時、エジプトやアルジェリアの脱植民地運動に心ひかれて、強く支持した事実がある。一昨年といえば、ちょうど『奇妙な仕事』を書いている最中に第三次世界大戦前夜であるスエズ動乱が終息した。スエズ動乱とは、エジプトのナセル大統領が

一九五六年、七月二六日、スエズ運河を国有化すると発表することに対して、イギリスとフランスは合同軍を創設して、イスラエル軍の侵略を支持した。

とりえずスエズ動乱に関して指摘したいポイントは二つがある。一つはエジプトを侵略したイスラエルという新しくできた国は大英帝国の支援を受けながらパレスチナ人を植民地化した。ナチスによる大虐殺の記憶がまだ生々しく残っているにもかかわらず、大英帝国の支持を受けながらイスラエルは南アフリカのようなアパルトヘイト政策を地元のパレスチナ人に押しつけた。つまり、被害者が加害者になっている。そしてもう一つのポイントは、被害者の「条件」を利用しながら、イスラエルは自分の領域と力を拡大するためにエジプトを侵略した。大事なのは、エジプトを攻撃したイスラエルの裏にイギリスとフランスがあった。大江は北アフリカにおける「脱植民運動」の問題と日本の関係を『われらの時代』(一九五九年)の設定として展開していくことに注目すべきであろう。ここで強調したいことは、大江が『奇妙な仕事』を書いている時点、ニュルンベルク、したがって東京裁判に対する価値観や理解について考えていたに違いない。少なくとも言えることは、連合国を象徴している「無名の英国人の女」の人道主義に頼る「残酷」という発言の裏には、自らの国が一九五二年までに植民地として支配したエジプトを無法に攻撃したという「両義性」である。イスラエルと手を組んだイギリスとフランスによるエジプトの攻撃の記憶がある当時の読者は、『奇妙な仕事』における「残酷」という言葉に直面する時、戦争責任だけではなく、成田龍一がいう植民地の問題が含まれている「帝国責任」が相対化されるはずであろう。

『奇妙な仕事』における(ナチスドイツの強制収容所を想起させる)人間を動物化する人種差別の暴力に絡んでいる帝国主義の問題設定を説明するために、マルティニクの詩人・政治家のエメ・セゼールの言葉が役に立つかもしれない。セゼールによれば、ヨーロッパの植民地主

義を支えた人種差別はナチスのユダヤ人大虐殺によって、はじめて白人の眼に見えるようになった。ヨーロッパ人の眼に見えたのは、セゼールの言葉を借りれば「とてつもない反動の衝撃」であった。続いてセゼールはニュルンベルク(したがって東京) 裁判で被告人に死刑宣告を下した勝利側に次のように反論する。「そうだ、ヒトラーとナチズムのやりかたは、臨床的かつ詳細に研究する価値がある。そして、優雅にして人道主義的かつ篤信家の二十世紀のブルジョワに教えてやるのだ。彼の中には、まだ自らの本性に気づいていないヒトラーがいる。彼にはヒトラーが宿っている。ヒトラーは彼の守護霊(デモン) である。彼がヒトラーを罵倒するのは筋が通らない。結局のところ、彼が赦さないのは、ヒトラーの犯した罪自体、つまり人間に対する罪、人間に対する辱めそれ自体ではなく、白人に対する罪、白人に対する辱めなのであり、それまでアルジェリアのアラブ人、インドの苦力(クーリー) アフリカのニグロにしか使われなかった植民地主義的やり方をヨーロッパに適用したことなのである。」(『帰郷ノート／植民地主義論』エメ・セゼール、砂野幸稔訳、平凡社二〇〇四年、頁一三八) ヒトラーの犯した罪を特別に持ち上げる人間に対するセゼールの反対の意見はその罪を軽く見ているというわけではない。逆に、セゼールはヒトラーの罪を相対化しながら、白人によって長い間苦しめられてきた非白人の存在を上を持ち上げて、これまで白人の記憶から忘却させられた事実を暴露している。

人間の仕業によって家畜化されてきた狼／犬たちが『奇妙な仕事』の「主語」になっている。主人公《僕》は人間であっても、「主語」の場所に位置しているのは動物であろう。植民地化によって人間が動物化されるが、セゼールの言葉によって人間と動物の関係が逆転することになるといえよう。これは重要な逆転である。なぜならば、被害者と思われてきた人たちは加害者の枠に入れられるようになるからだ。

ニュルンベルク裁判や東京裁判でこの事実は

完全に問題化されていなかったことも事実である。東京裁判を取り扱う三部作を書いた、大江と長い間友人として付き合いしてきた井上ひさしは、「東京裁判は勝者の裁きだったと批判するのはいいんだけど、そこに現れた人間の知恵を受け止めないと、未来は見えてこない。」と説明している。(井上ひさし「インタビュー、井上ひさし、東京裁判三部作と日本国憲法」『戦後日本スタディーズ「40・50」年代』岩崎稔、上野千鶴子、北田暁大、小森陽一、成田龍一(編者) 紀伊国屋書店、二〇〇九年、頁二五五) 井上にとって、東京裁判は「両義的なもの」だからこそ、私たちはもう一度東京裁判を取り返すべきだと思っている。つまり、「裁判は儀式なのだから」というアメリカの主張でニュルンベルク裁判が行なわれたわけですが・・・「この裁判儀式論を、東京裁判に転用すると、『あれは、不都合のものはすべて被告人に押しつけて、お上と国民が一緒になって無罪地帯へ逃走するための儀式のようなものだった』ということになります。」(同書、頁二五八) アメリカはA級戦犯に責任のすべてを押しつけて、日本は「外交を全部アメリカ任せにし、アジアに対する責任は弥縫策だけでやってきた。だからアジアに対する責任と戦後責任を、まだ十全には果たしていません。」(同書、頁二五八)

もしこれが東京裁判の悪い面であれば、その良い面はどこにあるであろうか。井上によれば、「東京裁判のいい面は、裁いたはずの国々が、やがて自分たちの持ち出した裁く理由に、逆に裁かれることになる。その意味では、あの国際裁判は実は新しい国際法の生成の現場だったのかもしれない。」(同書、頁二五六) こうして東京裁判の両義的な意味があるように、『奇妙な仕事』における「残酷」という発言の両義性が少し見えてくるかもしれない。「残酷」という言葉によって、学生たちと犬殺しは被害者であるが、加害者でもあったのではないかと、もう一度違った形で『奇妙な仕事』を読むことができる。しかし、加害者と被害者の複雑な関係を理解しやすくするために、読者は『奇妙な仕

事』における「責任」の問題がどのように展開していくか、分析する必要がある。

七 「あいまい」と日本の無責任システム

『奇妙な仕事』の《僕》が犬にかまれて、看護婦に傷の消毒や注射をしてもらってから戻ってくる時、犬殺しや私大生と女子学生が集まって警官と話し合っているのを見る。「どうしたんです」と《僕》が聞くと、女子学生は「あの男（管理人）は（犬の肉を肉屋へ売って）肉ブローカーだって」という。その話を聞く犬殺しと私大生は「あいまいな白けた表情」をする。肉ブローカーの逃走によって、皆のペイがおしまいだとわかる時、《僕》は「でも、病院の治療を受けたりした費用はどうなるんだ」と聞くと、「犬にかまれたのはあの男でも騙された肉屋でもない」と、「自己責任＝自己負担」を主張する警官が答える。「参考に呼び出すかもしれないから」と警官が皆に注意すると、私大生は「僕らが犬の肉を売ったわけじゃないでしょう」と、逆に被害者の立場として訴える。私大生の発言に応じて警官は「犬をむやみに殺すことだけでもおだやかではない」と私大生を加害者として警告する。これで病院側の責任などを完全に無視する警官が結局、犬殺しや学生たちに全責任を負わせる。この結末に対して《僕》は「僕らは犬を殺すつもりだったろ、とあいまいな声で」いった。「ところが殺されるのは僕らの方だ。」こうして加害者と被害者の関係があいまいになってしまう。

もし付属病院と（匿名の）英国人の女は責任をうまく逃避できるのであれば、結局だれがレスポンスビリティを背負うのか。肉ブローカーは逃走したが故に、責任を背負わないままに消えた。肉ブローカーは肉屋と肉の売買の約束を組む。つまり間に取り次ぎや組合が入らないような約束である。実は大江の初期の短編小説『運搬』はまさにこのような設定によって展開されるわけである。ある闇市場の肉屋が若い男を雇って、組合などを通さずに直接肉ブローカーから肉を購入する。「間に取次や組合が入ると、

俺の店に来るまでにおよそ二倍の高値だからね」「密売することは良いことじゃないよ」「しかし時にはそういうこともやらざるをえないんだ」と肉屋の男がいう。これは『奇妙な仕事』に登場する肉ブローカーと肉屋の密売の設定と同じではないか。つまり肉屋と肉ブローカーの間の商売はそもそも密売、要するに「違反」の売買である。しかし、この犯罪関係は警察に問われない。

こうして責任の経路はあいまい化されることによって、結局権威のヒエルラキーの底にいる学生たちや犬殺しが他の全員の代わりにスケープ・ゴートとしてはっきりした根拠のない罪を背負わなければならない。たとえばスケープ・ゴートの社会的役割についてアンドリュウ・マッケナは次のように説明している。「犠牲にする行為は、暴力を共同体から疎外させ、共同体を共同体の中から発生する暴力から守るので、犠牲は役に立つ。しかし、犠牲が暴力の根源を被害者に割り当てることによって、暴力の根源があいまい化され、暴力を決定的に共同体から排除させるための処理を防ぐ。したがって共同体は絶えずに犠牲を求める。」（『暴力と差異：ジラル・デリダ・脱構築』夏目博明（訳）法政大学出版局、一九九七年、頁三三）

病院側や肉ブローカーの代わりに学生たちを犠牲にすることは共同体の「権威」を守るが、同時に肉ブローカーなどの元々の「罪」を学生たちに背負わせることによって、原始の「罪」があいまい化され、隠蔽される。したがって『奇妙な仕事』における「被害者」と「加害者」の対立があいまい化される。この関係を定義するように、橋川文三は丸山真男の例を取りあげて、日本における「無責任の体系」のあいまい性について次のように説明する。「政治体制そのもののうちに政治的無責任の論理的根拠原因が内在することについては、「無責任の体系」としての天皇制の問題として丸山真男がつとに分析したところである。そこでは、政治意志形成過程のどのレベルをとっても、明白な責任主体の所在が判然しないようなシステムの構

造が解明された。「行為のみが残って主体は見当たらぬ」という推理小説めいた事態が日本政治の体制的特質から生じた。下僚は上長に、上長は大臣に、そして天皇は皇祖皇宗に、それぞれ責任を背負うという擬テオクラティックなシステムは、それを逆にいえば、天皇に集中される百領有司の責任のすべてが、天皇を媒介として「天壤無窮」の皇運の内面に調和を与えられ、実体化されていることにほかならない。」(日本近代史における責任の問題『天皇制』論集、一九七四年三一書房、頁三五四) 犬の処分という行為のみが残って、責任者の主体はどこにも見当たらぬ。まさに推理小説と同様に『奇妙な仕事』は読者が犯罪者の主体を求めるように展開していく。最後に読者が理解するのは、犯罪の対象になるのは、こうした無責任のシステム自体だということである。

ここで上述した東京裁判の分析を思い出せばいいかもしれない。井上ひさしは日本語に主語がないということを喩えて、東京裁判にも「主語」がなかったと指摘している。裁くべき「主語」(それはヒロヒト天皇をはじめ、日本人全体)がいなかったために、責任問題があいまい化されるようになった。A級戦犯に全責任を押しつけることによって、国民のひとりひとりの責任があいまい化されてしまった。『奇妙な仕事』の最後の場面は同じような状態として描かれているのではないか。要するに、国有の付属病院が「管理人」に仕事を任せただけから、完全に手を引いた。そして「管理人」が消えることによって、責任のヒエラルキーの下に置かれている学生たちや犬殺しはスケープ・ゴートにさせられるようになる。責任の「主語」が現れないからこそ、責任問題があいまい化されてしまうということである。では、学生たちに責任が全くなかったかといえば、そうではなかろう。犬殺しと学生たちにとって、彼らはただ単に「管理人」に言われた通りに仕事を行っただけである。つまり、犬殺しと学生たちにとって、彼らは悪事を行なうような人ではなく、「管理人」の命令に従っていただけである。しかも、私大

生と犬殺しが交わす犬の「人道的な殺し方」に関する討論によって、彼らは「倫理」を通じて自らの暴力を正当化しようとしている。

本稿の冒頭で触れたように『さよなら、私の本よ!』の「終章」に引用されている『奇妙な仕事』は「あいまいな」という言葉を強調している。たとえば、「終章」に繁が古義人にむかって、次のように発言する「記憶することは、おれたちが母親から受け継いだ特技だと思うよ。きみが受賞演説のタイトルにした「あいまいな」という表現が、そこにある。」周知の通りだが、『さよなら、私の本よ!』と『奇妙な仕事』の間に緊張感をなしている『あいまいな日本の私』という大江のノーベル賞の受賞演説は、戦後の政治体制が隠蔽し続けてきた歴史認識を「あいまい」と定義するのである。ここで主張したいことは、大江が『奇妙な仕事』で取りあげている「ファシズム」とは、ある政治的体制か制度というよりも、ある社会的文化的イデオロギーが引き起こす「精神状態」であり、その社会的精神構造の実体を隠蔽するのは、あいまい化されている歴史認識である。日本的ファシズムは、大江が提唱するように、「あいまいで執拗な壁」という日本社会と根強く関連している。大江が述べるように「近代化に続く現在の日本は、根本的に、あいまいさの二極に引き裂かれている、と私は観察しています。」その二極とは「日本の近代化はひたすら西欧にならうという方向づけのものでした。しかし、日本はアジアに位置しており、日本は伝統的な文化を確乎として守り続けもしました」と語られているところが明らかであるように、「そのあいまいな進み行きは、アジアにおける侵略者にかれ自身に追い込みました。」(『あいまいな日本の私』大江健三郎、岩波書店、一九九五年、頁八) 戦後日本における権力者(これは政治家にとどまらない人たちは戦争責任から逃れるために、歴史認識や伝統的感覚を意識的にあいまい化し、わざと国民の間に虚偽の情報を伝えた。大江がいうように、「官庁に役人という種族は、一般の人間とのあいだに壁をつくり、それにたよっ

て自分の人間的な責任をあいまいにする性癖がある。」(『厳密な綱渡り』頁三五-三六)

繰り返し言うが、国立大学の付属病院が医学部の(解剖?)実験のために、捨てられた野良犬を集める。ここで英国の女の「残酷だ」という投書が新聞にでて、スキャンダルに巻き込まれないように付属病院側は犬を処分すると決める。ここで犬を処分するもう一つ忘れてはならない理由がある。つまり国有財産である国立大学の付属病院に犬を飼いつづける予算がないために、とにかくなんらかの方法によって犬を処理しなければならない。政府と病院の間の責任——権威関係は結局、「財産」の問題と絡んでくる。政府は直接犬の処分と関わりがないといっても、病院の財産＝権威を支えているのはいうまでもない政府である。病院側は犬の処分の負担を回避するために、闇市場の「顔色の悪い」無名の男にすべてレスポンシビリティを回して、汚れた手を洗い清める。病院側は「全く関係してない」「私たちの病院からはもう犬は関係がなくなったんだ」と繰り返すように、犬の処分を引受ける男に責任を転嫁した。言い換えれば「責任の転嫁」によって肉ブローカーは病院と犬の間の責任のパイプラインを文字通りにブレイクさせてしまう。病院側が中間業者の肉ブローカーを雇う目的は、結局、犬との関係を抹殺するわけである。しかし、なぜ大江はこのような設定を『さよなら、私の本よ!』の末尾に回帰するのであろう。

しめくくり、或いは一回転としての回復へ

では、『奇妙な仕事』と『さよなら、私の本よ!』の関連はどういう機能を果たすか、ここでしめくくりとして論じたいと思う。本稿の冒頭で論じたように、大江は最後の三部作の三作目『さよなら、私の本よ!』の締めくくりとして『奇妙な仕事』を引用することによって、大江の作品全体が円環構造を成すようになった。したがって、この「回復」によって、読者は『奇妙な仕事』を読み直し、捉え直す要求が発生することになる。『さよなら、私の本よ!』を通じ

て『奇妙な仕事』に逆行することによって、反復されるのは小説のフィクション世界だけではなく、現実の出来事も繰り返されることになる。そうであるが故に、フィクション世界と現実の出来事との関係を比べ直す必要が出てくる。こうした問題意識を持って、『奇妙な仕事』の読者は、出発点として「反復」の仕組みを考えればいいかもしれない。

単純に言えば、大江が「反復」の仕組みを小説に導入する動機は、現実世界の出来事の反復、言い換えれば、歴史が繰り返すことに関連している。つまり、過去に起こった出来事が反復するとき、歴史認識が過去を管理する争いの中心になる。歴史の反復に伴う新しい捉え方(それは権力者が意識的に歴史認識をあいまいにした捉え方)に対応するために、大江は小説の世界において、歴史の「両義性」を強調しながら、もう一度違った形で現在に通じる過去の出来事を取り返そうとしている。

『さよなら、私の本よ!』に『奇妙な仕事』を引用することによって、大江は『奇妙な仕事』を「後づけ設定」として、新しい読み方を試みるのである。この引用は一種のパララックス(視差)を生み出し、反復される出来事に対して新たな見方を読者に与える。広辞苑によれば、パララックスという現象は、「二つの違った場所から同一物を見た時の視方向の差。そこから生ずる視覚像の差異をいうこともある。両眼で対象を見た時に生ずる両眼視差、頭や身体を移動した時に発生する運動視差などがあり、それらによって遠近や奥行の知覚が生ずる。」同じように、想像力と記憶力が絡み合う時、二つの違った時間帯系から同一出来事を見た時に差が生ずる。この差は、喩えて言えば「両義的な」差であり、パララックスの差でもある。

歴史における「記憶力」と「想像力」と認識の差の関係をもう少し説明するために哲学者のポール・リクルの言葉を参考にしたい。第二次世界大戦に出征、捕虜としてポーランド捕虜収容所で数年間拘留されたポール・リクルは『記憶・歴史・忘却』において、記憶と想像力

の関係を分析している。第一章「記憶と想像力」の冒頭にリクールはスピノザの次の言葉を引用している。「もし人間の身体がいつか二つか三つの物体で同時に刺激されたなら、のちに精神はそのうちの一つを想像し、すぐに他のものを想像するだろう。」（『記憶・歴史・忘却』ポール・リクール、久米博（訳）新曜社、二〇〇四年、頁三六）リクールによれば「このような記憶力と想像力との短絡は、観念連合の星のもとにおかれる。これら二つの刺激が接近性によって結びつけられるなら、一方を喚起する——したがって想像する——ことは、他方を喚起する、したがって思い出すことである。こうして想起に換言された記憶力は、想像力の跡にしたがって働く。」（同書、頁三六）

リクールが訊ねる、ごく単純な質問は、例えば人類の歴史における大虐殺を思い出す時、なぜ最初に頭に浮かんでくる例はユダヤ人のホロコーストであるか。なぜ「同時に」その他の例を思い出すことはないのか。ここでリクールの極めて複雑な理論に入る余裕はないが、次のように単純化できる。つまり人間の記憶を管理する、または悪用する権力があり、それは「個人」と「集団」の記憶をあいまいにする権力側の都合のいい歴史認識に家畜化されることである。偏った歴史認識を「学びほぐす」ために、人間の想像力を媒介して、リクールがいうショート・サーケット（短絡）させる必要がある。リクールがいう「観念連合の星」はバララックスの差を対立させるのではなく、その異なつた視点から見た歴史の出来事の「両義性」を暴露させるのである。

上述したように、『奇妙な仕事』が『さよなら、私の本よ！』の末尾で回帰してくることが重要である。この回帰によって、『奇妙な仕事』が書かれた頃の出来事は『さよなら、私の本よ！』が出版された時の出来事を通じて逆戻りするようになる。では、大江の感心を引くような反復している歴史的出来事は何か。この質問に答えるために、やはり上に分析したように『さよなら、私の本よ！』と『奇妙な仕事』に反復され

ている「あいまい」という言葉と、大江が言及しているガスカールの犬と狼の関係がこの回帰の意味を解く鍵になると思う。

『奇妙な仕事』における「シェパード／スピッツ」のイメージは朝鮮戦争を連想させている。朝鮮戦争というのは日本の再軍備路線の始まりであった。ここでガスカールが描く「犬と狼」の関係は役に立つかもしれない。第二次世界大戦に破れて、平和な状態に戻された日本が、朝鮮戦争の勃発を理由に再軍備の路線を始める。平和な状態から暴力（少なくともその可能性）に退化することは、いわゆる「犬と狼の区別がつかない」人間の状況を生み出してしまう。「犬と狼の区別がつかない」状況、それはいうまでもなく、戦争である。

朝鮮戦争の勃発によって、朝鮮半島への出兵で日本に置かれている米基地が空っぽになった。当時日本の左翼運動、学生運動や労働組合などの活動が活発で、米基地だけではなく、政府を無防備な状態にさせるわけにはいかないという理由によって、マッカーサー元帥は一九五〇年、七月八日吉田茂首相に対し「日本警察力の増強に関する書簡」を提示し、「事変、暴動などに備える治安警察隊」として、七万五千名の「National Police Reserve」の創設を要望した。ここで「警察予備隊」という言葉が重要である。これは平和の実現や戦争放棄という憲法九条に「決意」されていることを無視する再軍備の始まりに違いない。大江は一九五八年に書いたエッセイに入っている「戦後世代のイメージ」に一つの例として「戦力なき軍隊という言葉」をとりあげている。「警察予備隊、自衛隊、これは決してちがうものではないが、警察予備隊という言葉はいくぶんひかえめにもちいたとき、堂々と自衛隊という言葉を採用するにいたったときとのあいだには決定的な世間の風潮の変化があったのだ。」（同書、『厳密な綱渡り』頁二三）「世間の風潮の変化」というのは、おそらく朝鮮戦争の戦況悪化と日本共産党の「五一年テーゼ」による武装闘争方針の決定に関連しているかもしれない。この風潮の変化に

よって、追放解除にともなう旧日本軍軍人の復帰が始まり、マッカーサーは警察予備隊の重武装化の方針を要求するようになった。大江が新制高校に入った年に朝鮮動乱が始まり、その直後に予備隊から保安隊へ、そして自衛隊へと、「一つずつカエル跳びしながら既成事実をかためて行った。」(同書、「戦後世代と憲法」頁一三四) 同年に大江が神戸で自衛隊のデモンストレーションを見た時、彼の目に映ったのは「まぎれもなく軍隊だ。したがってそれは憲法の《戦争放棄》の約束を踏みじめるものだ。」(同書、頁一三四)

しかし、上に指摘した点はどのように『さよなら、私の本よ!』に関連してくるのか、という問題がまだ残っている。上述したように、『さよなら、私の本よ!』は単行本として二〇〇五年に出版された。しかし、翌年の二〇〇六年一月二日に大江の『「おかしな二人組」三部作』が発売されるようになった。これはとても重要な指摘である。なぜならば、二〇〇六年一月五日、岸信介の孫にあたる安倍晋三政権のもとで、「教育基本法」が国会での強行採決によって改悪されたからだ。「自らの政治方針の基軸に「戦後レジームから脱却」を掲げ、任期中の「新憲法制定」を表明し、「教育改革」を最優先する安倍政権にとって、その“力の政治”誇示する上で、象徴的な出来事であったと言えよう。」(小森陽一「憲法・GHQ・教育基本法」『戦後日本スタディーズ』頁一〇一) 二〇〇四年から「教育基本法」に対する反対の声が広がったにも拘らず、安倍政権はこの法案を国会で強行採決した。小森陽一が指摘するように、「憲法改正を公約に挙げて自由民主党が選挙を行なったのは、「五五年体制」の際の保守合同で、自由民主党が結党されたときの、鳩山一郎政権以来二度目であった。その意味では、二〇〇〇年代において、一九五五年(昭和三〇)年が反復されていることは明らかであろう。」(同書、頁一〇二)

ここで「反復」という言葉に注目すべきである。いったい何が反復されているのか。「五五

年体制」というのは、上述したように吉田茂のいわゆる「軽武装で経済復興」を生めるくみて、「むしろ占領軍の押しつけ憲法を改正して再軍備を推し進め、昔ながらの強力な国家をつくろうという意見」を持っていた自由党と民主党の政治家が保守合同を行なった歴史的事件を指している。(『昭和史、戦後編1945-1989』半蔵一利、平凡社二〇〇九年、頁三七八) ここで「押しつけ」というスローガンが憲法改悪を狙っていた政治家のかなめとなった。「昔ながらの強力な国家をつくろう」という意見を持っていた鳩山内閣に続く岸内閣が敗戦前の大日本帝国に命を捧げる臣民を生産するために、「愛国心=天皇を中心とする国家体制に従属する気分感情」を養う「教育勅語」や『国体の本義』に見られるような道徳教育に復帰して、「臣民一体の大家族国家」の再開を狙っていた。(小森陽一「憲法・GHQ・教育基本法」頁一〇四) したがって、憲法改(正)、教育基本法の改(正)や再軍備という三つの狙いは一つのセットとして考えるべきであろう。

特に注目されるべきところは、改正の対象となる憲法や教育基本法に書かれている言葉である。「四七年教育基本法」に書かれている言葉を「教育勅語」の中心的理念を象徴している「忠孝」や「奉公」に置き替えることや、憲法に「確定」されている「主権が国民の存すること」を意味する文章の削除によって、政府は国民の憲法に対する認識を徹底的に変えようとした。政府は「日本国憲法の理想の実現を教育の中心的課題にすることを否定し、「教育基本法」と日本国憲法を切り離すのが重要な狙いであることだ。したがって、この「四七年教育基本法」の全文第一文にこそ、「日本国憲法」体制の下での教育と、「大日本帝国憲法」をふまえた「教育勅語」体制における教育との決定的な違いが刻まれていた、ということが明らかになる。」(同書、頁一〇五)

結局、憲法九条の改悪を狙っている鳩山内閣につづく岸内閣が、自衛隊を自衛軍に変えるための議席の三分の二以上を獲得できず、憲法は

改正されなかった。しかし、先ほど触れたように、二〇〇〇年代に入ってから、自民党は改めて憲法改正や再軍備を国民に押し付けようとしている。安倍政権は、二〇〇六年の「四七年教育基本法」の改悪によって、愛国心を「共同愛」という言い方で国民を誤摩化し、「伝統と文化」を尊重する「人格の完成」を教育の現場で作るように命じた。しかし、「伝統と文化」の尊重など威厳のある言葉とは裏腹に、安倍は歴史教科書に書かれている慰安婦問題などを徹底的に否定し、「貶められた日本」を「改善」するために、全国共通の新しい歴史教科書の作成を求めるようにした。

さらにいえば、二〇〇〇年代、とりわけ「九・一一」の同時多発テロ以降、自民党は改めてアメリカの強い要求に応じて、憲法改正と再軍備の再開を試みてきた。アメリカの中東に対する侵略戦争の支援をきっかけに決定した「新テロ対策特措法」も再軍備の実現をさせようとした作戦にほかならなかった。「四七年教育基本法」の改悪の翌年二〇〇七年に自民党・公明党の連立与党が賛成し、いったん「新テロ対策特措法」は衆議院では可決されたが、「第21回参議院議員通常選挙により与党が参議院で過半数割れしている、ねじれ国会の中、野党で参議院における第一党の民主党が反対の姿勢を示した為、参議院では秘訣され、与党側による衆議院の再議決により成立した。衆議院再議決権が行使されて法案が成立したのは1957年の環境衛生営業運営適正化法案以来51年ぶり27例目、参議院で否決された法案が衆議院で再可決されるのは、一九五一年のモーターボート競争法以来57年ぶり2例目。」（「テロ対策海上阻止活動に対する補給支援活動の実施に関する特別措置法」Wikipediaに参考）繰り返す言うが、「反復」されるのは、自民党をはじめ日本政府の憲法改悪と再軍備というかねてからの強い願望である。そしてその願望を遂げるために、政府はあいまいな責任感を制度化しながら次の世代、つまり子供たちの歴史認識を麻痺させる教育制度を成立し、子供たちの想像力の空白に「愛国心」の

種を蒔く。

『奇妙な仕事』とその時代背景への回帰、そして『さよなら、私の本よ!』に書かれている『奇妙な仕事』を読むためのヒントは、「五五年体制」の際の保守合同と「四七年教育基本法」の改悪、したがって憲法改正にともなう再軍備への路線の「反復」を明白に現している。二〇〇七年に大江は「繊細な教養の所産が壊される」というエッセイのなかに、国家が子供にむけて、国家につかえるよう育てられた子供の教養に反対意識を示して、次のようなコメントを書いている。「国会で急がれている教育改革の法整備と、安倍首相の従軍慰安婦への発言は、「新しい教科書」作りから教育基本法改定までを見て来た者には、退屈になるほど一本道の進行です。しかし、あれだけ自他に惨禍をもたらした戦争からの再出発が、私らの社会に根づかせた「せんさい」な教養まで、総崩れとなっていていいでしょうか？」（大江健三郎『定義集』頁五六）この再軍備への過程の歴史的出来事が大江のフィクション世界に反復する意味がこれで明らかになるであろう。大江は『さよなら、私の本よ!』に、直接は“「五五年体制」が反復している”という言い方を取らない理由は上に述べたリクルールの指摘にオーバーラップしている。パララックスの視野によって発生するショート・サーケットは偏った歴史認識に隠蔽されている両義性、したがってもう一つの認識をあらわにして、読者の想像力に刺激を与える。これこそが大江の戦後日本史に対する「unlearn／学びほぐす」の目的を指しているのであろう。大江が『奇妙な仕事』における「あいまい」という表現を使っているのは、言葉がもつ両義性という「力」と「危険性」を指して、言葉の操りによる日本の無責任システムをあらわにしている。それは「言葉にあらわすこと、表現することは、現実にはたいして一つの解釈をこころみることである。表現者にしたがって、現実はいずれちがった顔をします。また、故意にちがった顔をあたえるために、ちがった表現を、むりやり現実におしつけることも不可能ではないのである。（「戦後世

代のイメージ』『厳密な綱渡り』頁二三)『奇妙な仕事』に逆行する意味は、こうして子供たちが過去に対する責任を放棄した「あいまいな白けた顔」を見きわめる力を読者に与えるところにある。『奇妙な仕事』に描かれているようなファシズムの精神状態を生み出す社会状況が反復しないために、つまり犬が狼に退化しないように、大人たちは次の世代の若い人たちに歪められた歴史認識を否定しながら、事実に沿った教育を行なう必要がある。

参考文献

大江健三郎の文献

『大江健三郎、作家自身を語る』新潮社、二〇〇七年

『大江健三郎・再発見』集英社、二〇〇一年

『「話して考える」と「書いて考える」』集英社、二〇〇四年

『読む人間』集英社、二〇〇七年

『定義集』朝日新聞出版、二〇一二年

『「伝える言葉」プラス』朝日新聞社、二〇〇六年

『さよなら、私の本!』講談社、二〇〇五年

『厳密な綱渡り』文藝春秋、一九七二年(第二七刷)

『あいまいな日本の私』岩波書店、一九九五年

その他の文献

アンドリュー・J. マッケナ『暴力と差異:ジラル・デリダ・脱構築』夏目博明(訳)法政大学出版社、一九九七年

今村仁司『ベンヤミン「歴史学テーゼ」精読』岩波現代文庫、二〇〇〇年

岩崎稔、上野千鶴子、北田暁大、小森陽一、成田龍一(編者)『戦後日本スタディーズ〈1〉40・50年代』紀伊国屋書店、二〇〇九年

エメ・セゼール『帰郷ノート／植民地主義論』、砂野稔(訳)平凡社、二〇〇四年

久野収・神島二郎(編)『『天皇制』論集』三一書房、一九七四年

ジェームズ・クリフォード『文化の窮状—二〇世紀の民族誌、文学、芸術』太田好信(他訳)二〇〇三年

ジョルジョ・アガンベン、『中味のない人間』岡田温司(他訳)人文書院、二〇〇二年

ジョン・ダワーの『敗北を抱きしめて:上下増補版—第二次大戦後の日本人』三浦陽一(他訳)二〇〇四年

ノルベルト・エリアス『ドイツ人:文明化と暴力』、青木隆嘉(訳)法政大学出版社、一九九六年

半蔵一利『昭和史、戦後編1945-1989』平凡社、二〇〇九年

ピエール・ガスカールの『けものたち・死者の時』渡辺一夫(他訳)岩波書店、二〇〇七年

ポール・リクール『記憶・歴史・忘却』久米博(訳)新曜社、二〇〇四年

レヴィ=ストロースの『野生の思考』大橋保夫(訳)みすず書房、一九七六年

『JKC50年史』遮断法人ジャパンケンネルクラブ、二〇〇〇年

吉見俊哉『親米反米』岩波新集、二〇〇九年